

令和三年度

卒業証書・学位記授与式 式辞

(山村学園短期大学)

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

春の若葉・夏の新緑・秋のどんぐり・冬の雪景、四季折々の美しくやさしさあふれるキャンパスで学んだ二年間でした。

本日は、学校法人山村学園より岡理事長 山村正巳まさき本部長にご臨席をいただいております。

最近とみに「サステイナブル」という言葉がテレビ、新聞などで使われるようになりました。二〇三〇年までの国際目標として定めたものが差し迫ってきたからと考えられます。これは「SDGs」(エスディージーズ)すなわち「持続可能な開発目標」のSのことで「持続可能な」という意味です。

私は、「保育・教職論」の講義の中で「江戸しぐさ」の話をしてきました。テレビはもちろんのこと、パソコンも携帯電話もない江戸時代、下町の人口密度が現在の数倍もあった江戸の町で人々は、どうしたら気持ちよく生活できるかということを考え、様々な工夫をしてきました。その姿、スタイルを表したものです。

ここであらためて江戸時代はどんな時代だったのか、考えてみましょう。

令和からさかのぼると平成・昭和・大正・明治・江戸と約四百年前となります。千六百三年、徳川家康が江戸に幕府を開いて

からの約二百六十年間が江戸時代。それ以前は群雄割拠といい、力のある者が刀や鉄砲で戦いを繰り返して七百年もの間、戦乱が続いていたのです。政局不安定な時代から平和な時代が続いたため独特の社会や文化がつくられてきました。

そうした時代の中で、サステイナブル、持続可能な社会が実現していったこととなります。自給自足で生きる農民、究極のリサイクル社会を実現した町民、簡素な美を重んじた武士。今我々が学ぶべきことは江戸にあります。と言えるかもしれません。

具体的には、田畑と森に囲まれて自給自足で生きる農民の暮らし、地形を最大限に生かした稲作の知恵、豊かな水の恵みをシェア、機能的で耐久性のある土間など

大いなる工夫でサステイナブルに暮らす町民、長屋は最高の共同体（共同の井戸、トイレなど）、徹底したリサイクルの町、瀬戸物の茶碗や皿が割れると現代ではすぐにゴミ箱行きとなりますが、焼継ぎ屋といつて接着剤で修理をする専門の職人がいました。また錆掛屋といつてなべや釜など鉄や銅器の破損したところを同じ金属を使ってはんだで修理する職人、果ては人の排泄物いわゆる人糞を集めて肥やしにするなど、様々な〇〇屋といわれる業者が一軒一軒歩いて巡回していたのです。江戸の循環型の社会を支える上で重要な役割を果たしていたと考えられます。武士

(長屋の浪人)に至っては、傘張りや修理などで質素ながら美を重んじた生活をしていました。

何よりも江戸時代の日本社会が自然に調和し、現代でも類を見ない環境にやさしい生活をしていた史実。環境問題が深刻化している昨今、先人や歴史から学ぶことは多いのではないのでしょうか。保護者の皆様にご挨拶を申し上げます。ご卒業、本当におめでとうございます。

本年度も昨年度に引き続きコロナウイルス感染拡大に明け暮れた年でした。一時期、少し収まってきたかに見えたのですが、ここにきてオミクロン株のさらなる感染力の強い変異株、「ステルスオミクロン」の感染が懸念されております。

卒業生の皆さん、「さいたま景観賞」を受賞した、緑あふれるこのキャンパスを愛し、この学園に学んで良かったと思える学園生活、本短大の校歌にも歌われている「友よ やまむら」にあるように、人生にとってかけがえのない友をつくることができたこと、そして東日本大震災やコロナウイルス発生のように何が起るか分からない不透明な時代、皆さんは平成、令和へ、さらにその次の時代へと心を繋いで一層強くたくましく生きてほしいと願っています。

今だコロナ感染が収束しない状況の中ですが、本日卒業証書授

与式が挙行できたことに、万感迫る思いがいたします。

四季折々に美しい花を咲かせる自然豊かな本学、就職先や人生
に行き詰ったときは、いつでも「ただいま」と言ってお別れするの
を待っていることを約束して、式辞といたします。

令和四年三月十七日

学校法人 山村学園短期大学 学長 野口 一夫